河　内　木　綿

41期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

自分の住んでいる町、「八尾」について調べてみたいと思い、いろいろと考えてみたところ、「河内木綿」を思い出した。そのことについて書いてある本を見たところ、もっと調べたいと思い、同時にどんなものかをみんなに知らせたいと思った。

Ⅱ　研究方法

(1) 図書館や、資料館などに行き、資料を集める。

・八尾市立図書館
・物産館
・府民センター
・八尾市役所、市民サービスセンター
・八尾市教育委員会
・商工会議所

(2) 織っておられる人のところに行き、話を聞かせていただく。

・八尾西武百貨店内、河内木綿工房　西川悠子先生

(3) 自分で出来ることをやってみる。

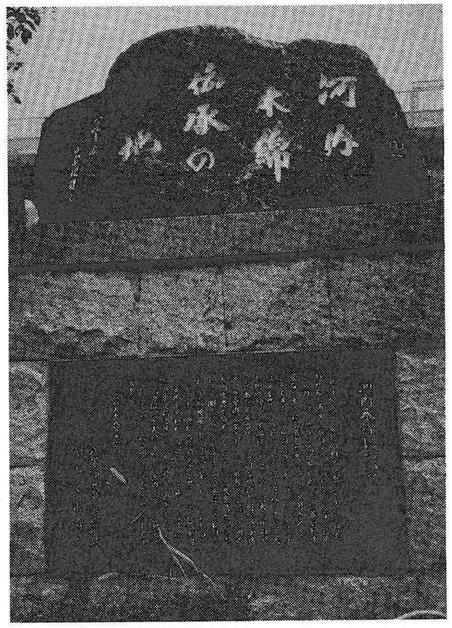
・糸紡ぎ
・草木染め

Ⅲ　研究内容

(1) 河内木綿とは

江戸時代から明治時代にかけて、河内の農家では副業として、自家産の綿で紡いだ糸で木綿を織った。これが河内木綿である。

当時、河内の農家はどこも綿を盛んに作っていた。畑はもとより、田にも作っていた。綿作りは肥料も多くいり、水やりも大変な労力であったが、収穫が良ければ、また利益も多かった。河内の綿の品種は、上等の部類に属す。収穫した綿花は大部分そのまま綿買人に売られた。一部は残して自家用とした。この分は自分の家で綿織りから糸紡ぎまでして、この糸で木綿を織った。



河内木綿伝承碑

当時の綿の繊維は、短かったので、糸が太い。した

がって織り上げた木綿もごつごつしていた。河内木綿はこのごつごつした丈夫な点が特徴であった。

農家で織られた白いままの木綿は木綿仲買人の手で、買い集められた。集まった木綿は、晒に出したあと、木綿問屋の手をへて各地へ売られていった。河内全体で年々生産される木綿の量は１００万反とも２００万反ともいわれているが、大部分は、こうした白木綿のまま他地域へ出されていたと考えられる。綿服、のれん、湯衣、のぼり、はんてん、酒袋などに使用された。

一方、糸を染めて織る縞木染や、織り上げた布を型染めしたものなども、はじめは自家用として作られたが、のち販売用のものも多くなった。われわれが今日、河内木綿として手にし、鑑賞するのは白木染めの方ではなく、この方の縞木織りか型染めした木綿である。これらは綿服、布団地に利用された。紺無地木綿は足袋地に使われ、白木綿と称した。

染料は大部分藍を使う。したがって色は藍色糸の濃紺、藍、縹の三系統で、このうち紺系が一番多い。

どの村にも、たいてい１～２軒の紺屋と呼ばれる染色業者がいて、村人の注文に応じていた。

さて、こうした河内の農家で織られた木綿が「河内木綿」として全国的に知られているのは、どういう理由からであろうか。

一つは、河内は日本で有数の綿作地帯であり、良質の綿を大量に生産することと、それに対応して木綿もまた大量におりだしたことであろう。生産額の多さがまず河内木綿の名をあげさせた原因となった。

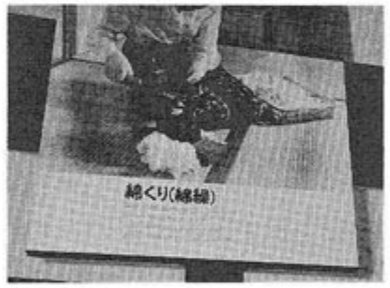
もう一つは量の多さとともに、綿の質が良かったことや、木綿は糸が太くて長持ちしたので実用第一の綿服に最適であったことだろう。京・大阪の人々の普段着として喜ばれ、また商家では丁稚などの任着せに最適であったという。右の２点が河内木綿として名声を博した理由であろう。しかしこの長所は逆に短所ともなっている。丈夫で長持ちということは、反対に糸・染色とも美的な面での洗練さに欠けているということになる。糸は太くでごつごつしているし、染めも実用本位で、緻密さ、繊細さがない。

この河内木綿の特徴は、江戸時代の河内の地域の性格がそのまま表われていると思える。河内には城下町はない。すべてが田舎だったといってもよい。田舎のねばりはあるが、都会の繊細さがない。木綿織りも藩の事業とは結びつかない農家の女たちの仕事だった。農家一軒一軒の努力は、実用を越えて、繊細に美しく仕上げるのには限界があったといえる。

(2) 綿ごよみ

月	綿
1	綿の地肥えをする（灰、尿を畝の間におく）
2	
3	
4	綿の台を作る
5	八十八夜，綿の種おろし（５月２日頃、陽），あら間引き（中旬、立春より８８日目），すじ肥え（下旬）
6	なか引き，麦の株切り（６月中旬）穴肥え
7	立間引き（半夏生），７月２日（陽、夏至から１１日目），水掻きを始める，だめ修理，花が吹き始める。
8	花の盛り（中旬～下旬）旧盆のころ
9	先切り，綿の桃（コットンボール）ができ始める，小枝切り，水掻きを終える。
10	綿がふき始める（上旬）。綿の吹くさかり（下旬）
11	綿のボロが多くなる，綿取り終わり、綿木を挽く
12	

(3) 河内木綿の工程


綿くり(綿繰)

１．綿くり

採取した綿を、綿くりロクロで綿と綿の実とにわけます。わたくりロクロは２本のロールがあり、その間に綿を入れると綿はロールを通り、実はロールを通らず手前におちる仕組です。

２．糸紡ぎ

糸車をつかい、糸を紡ぎます。

左手にじんぎを持ち、左手で糸車を回して糸を紡いでいきます。

草刈り

糸紡ぎ

３．草刈り

河内木綿の染色原料は近くの野や山で採集できる四季折々の草や木の皮です。

4．染　色

刈りとった草や木々は細かく切って乾燥させます。（あまり長く乾燥させない方がよい。）次に染材をふっとうした湯の中に入れ、染液を作ります。
その中に何回もくり返してつけ、染め上げていきます。

5．千切り巻き

縞立てをし、整経したたて糸を機械にかける作業。糸をくしでときながら千巻きの巻取棒に巻き取り機械にセットします。

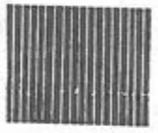
6．機おり

千切りにまかれた経糸は機械にセットされいよいよ織り始まります。横糸を１本１本打ちこんで織り上げていきます。

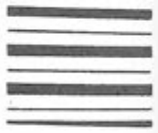
(4) 河内木綿の文様

＜縞＞千筋縞・万筋縞・大名縞・ドウジ縞・滝縞が主なるものであった。このうちドウシ縞はのちにミソコシ縞と呼ばれた一種の格子縞である。蛇形縞はよろけ形になったものである。後世にはまったく使用されないが中期ごろは互いに競って愛用されたそうだ。
その後、この他図のとおり多々の縞が考案され、河内木綿の縞柄として長く伝承された。

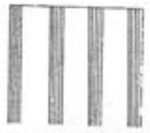
千筋縞


万筋縞

二筋縞


大名縞

子持ち大名縞


棒　縞

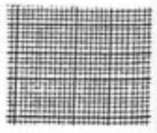
両子持ち縞

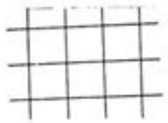
ヤタラ縞

両縄縞

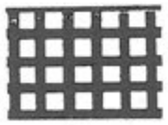
金通縞

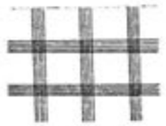
ミジンコ縞

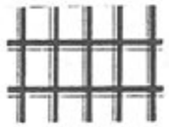

ミソコシ縞

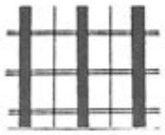

ゴバン縞

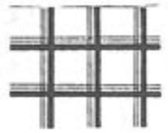
四筋サイロメ縞

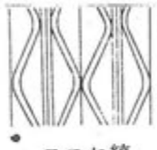

小格子縞

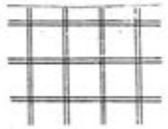

弁慶縞


子持ち格子縞


割込格子縞


子持ち格子縞


ヨロケ縞


二筋格子縞

＜文様＞文様主題を見るとすべて端祥的な意味を持ったものに限られ、植物系が最も多く、菊・桐・蔦・松竹梅等でありなかんずく菊花が圧倒的に多い。
動物系には鶴亀・鳳凰、又その他の生活用具など多種に亘って主題として選ばれている。

鶴亀慰文

鶴亀松竹梅唐草文

牡丹花唐草文

菊花唐草文

菊花唐草文

菊 花 文

(5) 西川悠子先生にインタビュー

河内木綿は大正時代に姿を消してしまいましたが、現在八尾市で唯一人河内木綿の復元、製作にとり組んでおられる西川悠子先生がおられます。（昭和61年度八尾市文化功労賞受賞）その西川先生にお話を聞かせて頂きました。

Q．河内木綿を始められた動機は？

A．素朴で藍をつかった木綿を織りたい。

Q．その魅力は？

A．やはり素朴な点ですね。

Q．苦労されたことは？

A．本当に何もなかったので様々な所に行き、老母たちに聞いて回ったことです。

Q．工夫された点は？

A．機械を自分の体に合うようにしたこと

と、草木染めですね。

Q．その機械はどうやって手に入れられたのですか？

A．奈良や丹波のおばあさん方にいただきました。

Q．一反おるのはどのくらい？

A．15m程度ですが、約1ヶ月。

Q．縦糸はどれくらい本数がいりますか？

A．700～900本くらいです。

Q．糸の太さは今でいうところの何番手ですか？

A．十六番手程度ですね。

Q．綿はどうされていますか？

A．自分で作っております。

Q．草木染めはどのようにされていますか？

A．茶色はくりのいがいがやから、あずき、玉ねぎなど。緑色は空色にくちなし、すすきをまぜます。赤は化学染料やべんがら（鉄）で。黄はくちなし、すすき、柿。それと綿の木ですね。藍染めはお願いしています。やりたいと思っていますが今やると片手間になってしまいますので……。

Q．これからの河内木綿は？

A．「江戸時代」や「明治時代」ではなく「今」の河内木綿を織っていきたいですね。（実践として時計を作っておられました。）

(6) 実　践

《糸くり》

見ていると、とても簡単そうなんですがいざやってみるととても難しく10cmできたのが最高という具合です。「慣れが大事」といわれましたが、これだけでもすごく苦労するなあと思いました。

《草木染め》

玉ねぎでも染められると聞いてやってみました。玉ねぎの皮を少しの水といっしょにたいて色を出し、それにつけたもので、なかなかいい色が出ました。さらにそれをかわかし、また染めるという風に何度も何度もくり返して、お気に入りの色を出していくそうです。

Ⅳ　結　　論（研究結果）

・河内木綿の製作工程などがよくわかった。又、どのようにすたれていったのかも。

・それを知って昔の人の苦労が忍ばれた。又、どんなに着る物を大切にしていたかということも。作るのが大変で、なかなか作れないからこそ大切にし、つぎあてをし、着ていたのだろう。

Ⅴ　参考文献

河内どんこう・わたしたちの八尾・歴史と文化の町八尾　ライフレポート '84

河内木綿譜・河内木綿の研究・河内木綿史